

# 白い雲

小川未明

青空文庫



みんなは、なにかすてきに、おもしろいことがないかと、思っているのです。敏ちゃんも、もとより、その一人でありました。往来で、義ちゃんや、武ちゃんや、かつ子さんたちが、集まって、なにか見て笑っています。

「なんだろう？」と、敏ちゃんは、走ってゆきました。義ちゃんが、真っ黒な砂鉄を紙の上のせて、両手で持っている、武ちゃんが、磁石で、紙の裏を摩っています。すると、砂鉄がむくむくと虫のはうように、磁石のいく方について動く

のでした。

「おもしろいのね。」

「不思議だろう。」と、武ちゃんたけが、自分じぶんもそれに見みとれて頭あたまを傾かたむけていました。

「僕ぼく、たくさん砂鉄さてつを取とったのだけれど、洗あらったら、これんばかりぼくになったのだよ。」

義よっちゃんは、砂鉄さてつの入はいっているびんをポケットから出だして、見みせていました。

これを見みると敏としちゃんは、にやりと笑わらいました。自分じぶんも大おおきな磁石じしやくを家いえに持もっていると思おもったからです。それは、いつかお隣となりの兄にいさんから、もらったものです。もう赤あかく塗ぬったところがだい

ぶはげていたけれど、もとは、いい磁石だったのです。

明くる日、敏ちゃんは、学校へいくと、休みの時間に、運動場の砂場で、小山といっしょに砂鉄を取るのに夢中にな

っていました。小山の磁石は、敏ちゃんのより、形は小さいけれど、赤いところも全部ついていて、吸いつける力は強かったのです。

「君、どれだけ？」と、敏ちゃんは、砂鉄を取るのに、負けるよ

うな気がして、きくと、小山は、

「まだ、こればかりさ。」といって、しわくちやになった、どろ

だらけの紙を開いて見せました。

「たくさん取れたね。僕の磁石は、だめだ。」と、敏ちゃんは、

自分の磁石が、ただ大きいばかりだというのが、なんとなく齒がゆくなりました。

「それに、電気をかけると強くなるのだけ。」と、小山が教えま  
した。

「電気？」

敏ちゃんは、そのことを、はじめて知ったのです。さつきから、この不思議な力は、いったいどこからくるものかということ考  
えていたのでした。大きくなれば、わかるだろう。けれど、あの  
太陽をだれが造ったのかわからないうちは、あるいは、この力  
もどこから生まれるかということにはわからないのかもしれないと、  
思いながら、茫然として、青空を仰いだのでした。

「君つ、ベルが鳴つてしまつたんだ！」

こう叫ぶと、小山は、あわててはね上がりました。敏ちゃんも、驚いて、運動場に人がいないのに気づくと、急いで小山の後を追つて、教室へ駆けつけたのです。

先生は、後れてきた二人を、じつとごらんになりましたが、黙つていらつしやいました。敏ちゃんは、お座についたけれど、しばらく心臓がどきどきとしていました。

## 二

「磁石に、電気をかけると、強くなるってほんとう？」

敏ちとしゃんは、小山こやまのいったことを義ちよつゃんにききました。義ちよつゃんは、敏ちとしゃんよりは、一年上ねんうえの組くみです。

「ほんとうさ、電車でんしゃの通とおつたすぐ後あとへ、レールに磁石じしやくをつけると、電気でんきがかかって、強つよくなるのだよ。僕ぼくたち、これからいくのだが、君きみもいかない？」と、義よつちゃんは、いいました。

「レールに、磁石じしやくをつけるの？」

日ひごろ、お母かあさんに、電車道でんしゃみちへいつて、遊あそんではいけないと、堅かたくいいきかさされているので、それが頭あたまに浮うかぶと、敏ちとしゃんは、どうしようかと返事へんじに迷まよいました。

「すぐ、レールにつけなければ、だめなんだよ。僕ぼくたち、冒険ぼうけんをして、電気でんきをかけにいくのさ。」



「武ちゃんど？」

「ああ、あまり小さいものは、危ないけど、君もいつしよにおいでよ。」と、義ちゃんは、すすめました。

もし、お母さんに知れたら、しかられると思っただが、義ちゃんが、

「かつ子さんだつて、くるのだから。」といつたので、弱虫と思われては、いけないと思つて、

「僕もいく。」と、敏ちゃんは、約束しました。そして、ポケツトから、大きな磁石を出して、ながめていますと、

「お見せ、大きいのだね。これに電気をかけたら、ものすごくなるよ。鉄びんでも、なんでも持ち上げるだろう。だけど、赤いと

ころがはげているから、じきに力が弱くなってしまうね。でも、

大きくて、すてきだなあ。」

義ちゃんは、敏ちゃんの磁石を見て、うらやましがりました。

そして、手に取って、つくづくとながめていました。

午後から、おおぜいで電車道へ出かけたのです。彼らは地を

震動して、電車が通過するたびに、飛び出しては、レ

ールにめいめいの磁石を押し当てていました。その間、女の子

供たちは、左や右を見張っていました。

遠くからトラックや、オートバイの影が見えると、

「あつちから、きた！」と、注意をしました。

みんなが、いつも遊ぶ原っぱへもどってきてから、磁石の試

験けんをしてみたけれど、その力ちからには、前まえとすこしの変かわりもなかつたのです。義よつちゃんや、武たけちゃんの磁じ石しゃくは、やはり敏としちゃんのおおおお大きな磁じ石しゃくよりは、ずつと力ちからが強つよかつたのでした。

晩ばん方がた、敏としちゃんは、ラジオ屋やのおじさんのところへきました。

そして、電でん車しゃのレールから、電でん氣きを取とつた話はなしをしました。

色いろの黒くろい、口くちひげの生はえたおじさんは、目めをまるくして、敏としちゃんの話はなしをきいていましたが、

「あぶないな、過あやまま過あやままつてひかれでもしたら、どうするつもりだ。な

んで、そんなことで電でん氣きが取とれるものか。どれ、おじさんが、磁じ石しゃくに電でん氣きをかけてやるから、もう、あぶないまねをしてはいけ

ないぜ。」と、論さとしました。

おじさんは、ラジオの針金をぎりぎりはりかねと敏としちやんの磁石じしやくに巻まきました。つぎに、その二本ほんの線せんの端はしを電池でんちの端子たんしに結びつけました。すると、電流でんりゆうが通つうじて、青あおい、美うつくしいが火花ひばなが散ちりはじめました。

「ああ、これぐらいでいいだろう。これなら、たくさん砂鉄さてつが食くいつくぜ。」と、人ひとのよいおじさんは、笑わらつて、磁石じしやくを敏としちやんに渡わたしてくれました。

## 三

地理ちりの時間じかんでした。小山こやまは、夜店よみせで買かったといつて、丹下左膳たんげさせん

と侍さむらいのちいきな人にんぎよう 形かたちを二つ三つ、紙かみに載のせて、下したから磁石じしやくを操あやつつて踊おどらせていました。磁石じしやくの動うごかし具合ぐあいで、人にんぎよう形かたちどうしは、たちまちチャンバラをはじめののです。小山こやまは、先生せんせいのお話はなしなど、耳みみに入れようともしないのです。

「やあ、やあ。」と、先生せんせいには聞きこえないように、掛かけ声こゑをかけて、丹下左膳たんげさぜんと侍さむらいに立たちまわりをさせていました。場所ばしょの近ちかいものは、笑わらいを殺ころして見みていました。敏としちゃんは、先生せんせいにわかおもると思おもつたから、気きが気きでなかつたので、

「見みつかるよ。」と、小山こやまに、注ちゆう意ういをしました。

しかし、もうこのときは、遅おそかつたのです。先生せんせいは、小山こやまをにらんでいらつしやいました。ふいに、先生せんせいがだま黙だまりになつた

ので、小山が、顔を上げてみると、ほとんど、いつしよに、

「小山、さつきからおまえはなにをしている？ わかっているかね、塩原温泉はどこにあるか、いってごらん。」と、先生

は、小山をお指しになりました。

小山は、片手に、磁石と紙を握って、机の下へ隠すようにして、立ち上がりました。

「栃木県にあります。」

「じゃ、群馬県にある、有名な温泉場は？」と、先生は、

お問いになりました。

今度は、よく聞いていなかったもので、小山は、ちよつと返事ができませんでした。このとき、二、三人席をへだてて、平常から

おもしろいことをいって、人を笑わせる武田が、小さい声で、

「どっこいしょ。」といいました。

これをきいたものが、笑い出すと、先生は、怖ろしい目を武田の方へ向けて、おにらみになりました。とうとう我慢がしきれなくなつたというふうで、

「小山と武田は、ここへ出る！」と、先生は、どなられたのです。

教室のうちがしんとしました。二人が、ぐずぐずしている

と、先生は、まず小山の席へいらして、  
「いま、やっていたものをお見せ。」と、お座から、引きずり出されました。

武田は、先生の権幕に抗しがたいと知ると、自分から席を出て、先生のいられる教壇の前へきて立ちました。先生は、

「武田、おまえは、さっきの唄をうたつて、小山は、ここでみんなに人形を踊らしてごらん。」と、おっしゃいました。

小山は、さすがに耳の根まで赤くして、うつ向いていましたが、武田はしかられても、頭をかきながら笑っていました。

このとき、敏ちゃんは、一人だけ、窓の外で、つばめが自由に、青い空を飛びまわっているのを、じつと見守つて考えていたのであります。

「このつぎから、教室へこんなものを持って入ったら許さな



いぞ。」と、時間じかんが終おわつたときに、先せん生せいは、小こ山やまにおつしや  
 いました。そして、それまでそこに立たたされていた二人ふたりは、はじ  
 めて許ゆるされたのでした。

#### 四

敏としちゃんの大おおきな磁じ石やくは、ラジオ屋やのおじさんから、電でん氣きを  
 かけてもらつて、ばかに力ちからが強つよくなりました。

学が校っこうの帰かえりに、往おう来らいの上うえで、義よつちゃんや武たけちゃんは、敏とし  
 ちゃんをはさんで、敏としちゃんの大おおきな磁じ石やくに自じ分ぶんたちの小ちいさな磁じ  
 石しやくをお押おしつて、電でん力りよくをわけてもらつていたのです。

「いいんだねえ、敏ちゃん、すこしばかり分けてもらっても、敏ちゃんのほうは、ずっと強いんだものね。」と、武ちゃんが、気がねをしながらいいました。

「僕も、ラジオ屋のおじさんにお願ひして強くしてもらおうかな。」と、義ちゃんがいいました。

「いいよ、僕のは、赤いところがはげているのだから、どうせ使わなくても、ひとりでに電気がなくなるのだもの。」と、敏ちゃんは今度、お母さんに、赤いところはつきりとした、新しい磁石を買ってもらおうことを頭に描いていました。そこへ、同じ組の西山がきかかりました。

「君、それよりか、鉱石を取りにいかない？ そのほうが、よ

ほどおもしろいぜ。磁鉄鉱も、黄銅鉱も、金もあるのだよ。」  
と、郊外の方から通学する西山が、いいました。

「ほんとうかい、どこに？」と、義ちゃん、敏ちゃんは、磁石のことを忘れたように、目を輝かしました。

「いま、河の工事をして、割った石塊がたくさんあるのだ。さがせば、いろんな石が見つかるよ。金は、紫色をしているだろう。ちか、ちか光る黄銅鉱と、それに、方解石が、いちばん多い。方解石は、たくさんあるよ。」

それだけでなくてさえ、みんなは、なにか珍しい、愉快なことはないかと思つていた矢先ですから、それをきくと、飛び立つばかりにうれしかったのです。西山を往來に待たしておいて、かば

んを家へ投げ込むと、すぐに、敏ちやんも、武ちやんも、義ちやんも、駆け出してきました。その姿を見つけると、

「わたしも、つれて行ってね。」

原つばに遊んでいた、かつ子さんと、よし子さんが、みんなの後を追ってきました。彼らは、電車を横切つて、緑の樹がたくさん目に入る、静かな、せみの鳴き声のする、涼しい道を急いだのであります。

西山は、一同を野中の河普請場へ案内しました。工事はなかなかの大仕掛けでした。河水をふさいで、工夫たちは、河底をさらつていました。細かいレールが、岸に添つて、長く、長くつづいています。その行方は光つた草の葉の中に没していました。

工事場の付近には、石の破片や、小砂利や、材木などが積んで  
 ありました。また、ほかの工夫たちは、重い鉄槌で、材木を  
 川の中へ打ち込んでいます。太い縄で、鉄槌を引き上げて、打  
 ち落とすたびに、トーン、トーンというめり込むような響きが、  
 あたりの空気を震動して、遠くへ木霊していました。ときどき、  
 思い出したように、ゴーツ、ゴーツと叫びを上げて、トロツコが  
 幾台となくつづいて、小石を満載してきました。これを工事  
 場へ開けると、ふたたび、あちらへ引き返していくのでした。

「あつちに、まだ割った石がたくさん積んであるのだよ。」

西山は、先頭に立って、草原の方へ突進しました。な  
 るほど、トロツコの通るレールから、そう離れていないが、工事

場じばからはかなり距へだたった草そう原げんの中に、石いしの破は片へんが、白しろい小こ山やまのごとく積つみ重かさねてありました。知しらない子こ供どもが二、三にん人さき、先さきにいって、熱ねっしん心しんに一つ、一つ、石いしをより分わけている姿すがたが見みえたのです。

「石いしを取とつてもしかられない？」と、敏としちゃんが、ききました。

「この大おおきいのは、一つだつて重おもくて持もつてはいかれないさ。ちつとばかり、欠かく分ぶんなら、かまわないだろう。」と、西にし山やまが、答こたえました。

「しかられないかなあ。」と、義よっちゃんは、考かんがえながら、トロッコの通とおるたとびに、線せん路ろの方ほうを見みました。

「怒おこつたら、逃にげればいいや。」

西山にしやまは、そういつて、もう石いしの丘おかへ登のぼっていました。

「ほら、これが方解石ほうかいせきなんだぜ。」

白い石しろいしの破片はへんに、他たの色いろとまじつて、ひときわ白く光沢こうたくを放はなち、塩しおなどの結晶けっしょうのように見えるのです。方解石ほうかいせきだけは、割わつても、割わつても、四角形かくけいに割われる特徴とくちようを有ゆうしていました。

「ちよつと、水晶すいしょうみたいだね。」と、武たけちゃんが、いいました。知らない子供こどもたちまで、西山にしやまのそばに寄よってきました。その子供こどもたちの手てにも、なにか石いしが握にぎられています。

「これ金きんでない？」と、その一人ひとりが、自分じぶんの持もっている、石いしの破片はへんを示しめしました。

「どれ、そいつは磁鉄鉱らしいな。金は、もつとうす紫色を帯びているよ。」と、西山が、いいました。

「この、ちかちか光るところだけは、銅なんだろう？」と、義ちゃん、のぞきました。

「そうらしい。」

「僕、方解石を見つけた！」

見ると、敏ちゃんは、石で、石を打って、その部分だけを取ろうとしています。

「君、方解石って、どんなの？」

知らない子供の一人が、よく知ろうとして、敏ちゃんにききました。



敏ちゃんとしが、教えておしいると、ちようど、ゴーツ、ゴーツと風かぜを切きつて、レールの上うえを走はしつてくる、トロツコの音おとがしました。

「おい、がきども、いたずらするなあ。」と、そのトロツコは、通とおり過すぎるときに、わめいてゆきました。

二人ふたりの労働者ろうどうしゃが、空からのトロツコに乗のっていました。元げん氣きのいい若わか者ものでした。後あとからも、後あとからも、いくつかのトロツコはつづいてゆきました。中なかには、こちらを見みて、親したしげに笑わらつていおとこく男おとこもありました。

「さっきの奴やつ、生意なまい氣きだね。」といつたのは、武たけちゃんです。

「もし、あいつが飛とんできたら、僕ぼくたち逃にげようか。」

「逃にげなくたっていいさ。」

「そうしたら、おもしろいな。なんで僕たち、捕まるもんか。」

「石を投げてやろうや。」

「かつちゃんや、よし子さんは、早くあっちへいっておいでよ。」  
と、義ちゃんやが、いいました。

「私、つかまったら、あやまるわ。」と、よし子さんが、いいました。

「いやよ。だって、私たちなにもしないんでしょう、見ているだけですよ。」と、かつ子さんが、いいました。

「それだから、女なんか、こなければいいんだ。」と、武ちゃんが、怒りました。

「もう、いいよ。」

「それよりか、早く、いいのを見つけてようや。」  
 敏ちゃんとしは、真まつ赤かな顔かおをして、石いしを石いしに打うちつけていました。  
 しばらく、みんなが、石いしを割わるのに夢むちゆう中ちゆうだったのです。

## 五

突然とつぜん「ブーウ。」と、長ながいうなり声こゑをたて、トラックが、原はら  
 つばの中なかへ入はいってきました。石いしの破は片へんを運はこんできたのです。  
 「きたっ！」といつて、みんなは、逃にげ出だすような身みがま構かまえをした  
 けれど、もう逃にげ出だすすきがなかつた。はや、トラックは、目めの  
 前まえにきて止とまりました。止とまるといっしよに、ぱつと三人にんの男おとこが、

自動車じどうしゃの上うえから飛とび降おりました。そのうち、一人ひとりの男おとこが、敏としちやんのそばへいつて、手てもとをのぞき込こんで、

「どんな石いしを探さがしているんだね。」と、ききました。そのやさし  
みのある質しつもん問もんに、みんなは、ちよつと意い外がいな感かんじがしました。

「方解石ほうかいせきを取とつていたのだ。」

敏としちやんは、正しょう直じきに答こたえたのです。

「学が校っこうの理り科かで、習ならつてい  
るんだな。」と、その男おとこは日ひに焼やけ  
た黒くろい顔かおに、白しろい歯はを見みせて笑わらつていま  
した。

「おじさん、この石いしはど  
こからくるの？」と、敏としちやんが、き  
きました。

「埼さい玉たまや、茨いばら城きの方ほうからくるんだ。大おおきな石いしを機き械かいにか  
けて、

こんなこまに細こまかにして、電車道でんしゃみちや、河川工事かせんこうじに使うつかのさ。」と、その男おとこは、答えこたました。

これをとしきくと、敏としちやんは、なんとなく石いしの故郷こきょうがなつかしいき気がして、思おもわず、大空おおぞらの果はてをながめたのです。先さきのとがつた森影もりかげが、まぶしい日ひの光ひかりに霞かすんでいて、遠とおくの地ち平線へいせんには、白しろい雲くもが頭あたまをもたげていました。

三人にんのおじさんたちは、石いしをそこへ下おろすと、またトラックを運うんでん転てんして、原はらっぱの中なかをどこへとなく消きえてしまったのです。

「あのおじさんたちは、いい人ひとたちだな。」

「この石いしは、遠とおいところからきたのだよ。」

「トンネルを掘ほるときは、ダイナマイトで、岩いわを砕くだくのだってね

。

「ああ、ド、ドーン！　すごいだろうな。」

「いまのおじさんは、ラジオのおじさんに似ているだろう。」

「ちがうわ。」

「似ていたよ。」

「そう思うのは、敏ちゃんだけよ。」

石山の周囲で、こんなことをいつていると、また、ゴーツ、

ゴーツと、トロツコが、風を切つて走つてくる音がしました。こ

こからは、草の間に見えつ、隠れつしている細いレールは、頼り

なげな二本の火ばしのようにしか見えなかつたのです。

小砂利をいっぱい積んだ箱の上に、先刻のどなつた、元気な若

者が突つ立っていました。敏ちゃんは、握っていた石を手から  
 放して、その方を振り向いていると、男は、なにかいいかげなよ  
 うすをして、こちらをにらんでいたが、ちょうどカーブへさしか  
 かった途端に、調子づいているトロツコは、はっと若者が気  
 づいたときには、もう脱線して、止まってしまったのでした。  
 だが、それを知らずに、後から、後から、ほかのトロツコは、唄  
 など歌いながら、走ってくるのです。

あわてて、若者は両手を高く上げて叫びました。

「だっせんだぞう。」

すると、いくつかのトロツコは、ぴたりと止まってしまいまし  
 た。

「あいつ、生意気だから罰が当たったんだね。」と、義ちゃんが、  
いいました。

若者は、まったく子供たちの方に気を取られて、自身の注

意を怠ったためでした。そこで、いっしょうけんめいになって、

脱線した車を直そうとしたけれど、とうてい二人の力ではだめ

でありました。しかし、仲間はそれと悟ると、すぐに車から飛び

降りて、トロツコの脱線した場所へ集まってきました。そして、

力を協せて、やっと重い車をもとの位置にもどすことができたの

です。

トロツコは、ふたたび、レールの上を快く走りはじめました。

「万歳！」と、武ちやんと、敏ちやんは、手をできるだけ上げ



て、叫びました。おそろく、二人の若者は、その声を聞いたであらうけれど、自分の意地悪さを心に恥じたのか、こちらを見ずにいってしまいました。

「もう、帰ろうよ。」

「今度は、あのいいおじさんだつて、きつとしかるから。」  
 帰りかけると、知らない子供たちも、敏ちゃんや、かつ子さんや、義ちゃんたちといつしよになって、原っぱを去りました。めいめいが石の破片を抱いて往來へ出た時分、幾分日が蔭つて、どこからともなく涼しい風が吹いてきました。白い雲が、いつのまにか、自分たちの頭の上まで広がっていたのです。

途中で、西山や、知らない子供たちと別れました。

「家へ帰ったら、みんなで、石を分けようね。」と、敏ちゃんが、  
いうと、

「僕は、こんど理科の時間に、学校へ持って行って先生に見  
せるのだ。」と、義ちゃんが、いいました。

みんなは、楽しかった、一日の遊びを思い返しました。黄金  
色の夏の日は、まだ、暗くなって遊べなくなるまでに、だいぶ  
時間があつたのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年7月

※表題は底本では、「白《しろ》い雲《くも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白い雲

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>